熊本大学学術リポジトリ

俳句 ： 文苑

著者	梓氷川，戀花，蝶ニ
雑誌名	龍南會雑誌
巻	５０
ページ	６３-６４
発行年	1896-11-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/4644

てる日もまたぬ朝顔の　　去ばしのはえを去たひつゝ
まことの道を打はなれ　　やみよりやみに迷ひ行く
あはれ高きも賤しきも　　足るをし知れる心には
雲井の庭も玉敷も　　うらやむことはあらざるを
心のなさけふかくして　　中のむつびのあつければ
わらやの床も蓬生も　　つゆもいとひはせぬものを
浮世のちりを立ちはなれ　　のどけく住める我宿を
つれなくすてゝあだし世に　　迷へる君が悲しさよ』
やをら角笛とり出でゝ　　一聲たかくふきなせば
かたへの犬の立つなべに　　羊のむれは飯り來ぬ
杖をあげつゝ守の男は　　入日の岡をさし行けば
かへり喜ぶ小羊の　　こゑも狹霧にうもれけり
かすかにひゞく入相の　　鐘より外に聲もなく
さびしき牧の夕ぐれは　　枯葉をわたる風寒し。

俳句

入る月に社の獅子の寢ざめ顔　　梓氷川
夜更けて嵐に白し天の川

明月の夜更けて路に網うねり
月落ちて大滄溟の波暗らし
秋かなし喇叭にかすむ城の暮
秋淺き日影にのこる暑さかな
月の夜は猶身に沁むや荻の聲
照るとしもなき宵月や薄紅葉
置く露になやむ姿の小萩かな
夜もすがら聞あかしけり秋の雨
ふき拂ふ衣手さむし秋のろせ
葺狩のもぐりは手柄ばなしかな
朝顏の露よりもろき命かな
藻汐たくこゝも浦なり須磨明石
秋風や荒野のはてに矢一筋
夢破る聲一引や月の鹿
秋の山同行ひとり失ひぬ
槌音の月にみだるゝ碪かな
淋しさを散てまぎらす柳かな
幼子を畚の片荷や稻の秋
旅に寢て初鴈遠く聞く夜哉
墨染の袖も濡らすや菊の露
靜かさや芭蕉を破る夜の雨

戀花蝶　二